
テディ・ベアの秘密

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テディ・ベアの秘密

【Nコード】

N3552C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

17歳の誕生日、幼馴染の高雄にもらった大きなテディ・ベア。男子高校生にテディ・ベアって。と、内心ツツコミを入れた優人だったが、その気持ちそのものは嬉しくてたまらない。だが、恥ずかしい思いをしながら持ち帰ったテディ・ベアには、秘密があったのだった。ヒミツシリーズ1作目。

「これ、やる。優人に似合うだろ」

そう言つて幼馴染みの高雄がくれた、大きなテディ・ベア。

一抱えもあるそれを見たとき、オレはなんの冗談だ、と思った。

オレはもう高2だ。しかも男だ。テディ・ベアを喜ぶようなガラじゃない。

たしかに女の子みたいだとか、中学生に見えろとか、さんざん言われるのは認めるけど……。

高雄にまでそう思われてたのは正直、ショックだった。

でも誕生日を律儀に覚えててくれたことが嬉しくて、わざわざ買ってきてくれたことが嬉しくて、オレは恥ずかしい思いをしながらテディ・ベアを持ち帰ったのだった。

やっぱり、男の部屋にはテディ・ベアは似合わない。ベッドに置いたテディ・ベアを見つめながら思う。

「……やっぱ、しまつところかな」

口に出してから、ぶんぶん首を振る。

いや、そんなことはできない。

だってこれは高雄が、オレにくれたものだ。

多少似合わなかつたとなんだろうと、好きな相手からもらったものはなんだって嬉しいし、いつも見えるところに飾っておきたい。

そう、オレは高雄に恋をしている。

ずつとなにをするにも一緒だった幼馴染み、しかも男に恋をするなんて！ と自分でも思う。

でも仕方ない。だってオレは高雄が好きなんだ。

オレは目を閉じて、テディ・ベアをぎゅっと抱きしめた。

「おまえが高雄だったらいいのに」

くだらない仮定。なんて健気なオレ、なんて思いながら、テディ・ベアの鼻先にキスをする。毛が口の中に入って変な感じがした。

「好きだよ、高雄」

今まで一度もプレゼントなんかくれたことがなかったおまえが、こうしてテディ・ベアをくれたただで、オレの想いはあふれ出しそう。いつそう腕に力をこめる。

「好きだ。好きなんだ。オレだけのものになってよ、高尾」

言葉があふれてくる。

閉じたまぶたの裏に高雄が浮かぶ。

高雄はオレと違って頭がいい。ばりばり理系って感じの、めがねがよく似合ういい男だ。白衣を着るととんでもなくサマになる。

機械いじりが趣味なんていうちょっと暗そうな趣味でさえ、高雄の趣味だと聞くと納得がいく。それくらい高雄はかつこいい。

だから高雄はクラスの女の子にもモテル。オレも何度かラブレターの配達人をやらされた。そんな高雄だから、オレには望みなんてカケラもないのだ。

「……でも言えるわけないよなあ……」

もしも言ったら、幼馴染みって地位まで失うハメになるだろう。

オレはため息をついた。

高雄への愛しさはあふれそうだっていうのに、オレはそれを本人に伝えることさえできない。せいぜいが、高雄の身代わりにテディ・ベアに向かつて告白する程度だ。

そのとき、携帯の電子音が鳴り響いた。

ディスプレイには高雄、と表示が出てる。

「もしもし？」

いぶかしく思いながら携帯に出た。

「ああ、優人」

携帯電話越しに聞こえてくる、抑揚に乏しい高雄の声。それだけで頭がくらくらする。

「実は今から懺悔がしたい。聞いてくれないか」
懺悔？

なんだろう。そう思いながらうなずいてから、電話越しだったことを思い出していいよ、と言った。

「今から言うことを聞いても、決して怒らないし軽蔑もしないと約束して欲しい」

「聞く前から約束なんかできないって」

「いいから、約束して欲しい」

言い募る高雄の迫力に圧されてしまう。結局、いいよと答えるほかなかった。

「実は今日プレゼントしたデヴィ・ベアには仕掛けがしてある」

「……へえ。しゃべるとか？」

「そんなくだらないことはしない」

「じゃあ、なんだよ」

「盗聴器が仕掛けてある」

「ああ、盗聴器ね、そりゃすごい……って盗聴器！？」

思わず声が裏返った。

盗聴器って……つまり、あの、音声を盗み聞きする道具だよな？
それってことは、つまり

「もうわかってると思うが、おまえのセリフは全部聞かせてもらった」

宣告された瞬間、顔が真っ赤になったのがわかった。

「どうしてそんなことしたんだよ！ 試作品の性能を試したかったんだとしたら最低だ！」

「性能実験なら充分やってある。それは成功した第1号だ。軽量化・小型化を行って、ターゲットにより気づかれにくくすることに成功した」

「オレが聞きたいのはそんなことじゃない。どうしてそんなことしたんだ、って聞いているんだ」

「……おまえのことをすべて把握していたかった」

「は？」

まるでストーカーのセリフだ。

高雄じゃない人間が言っただとしたら、間違いなく殴っているところだ。高雄が言っただにしたって、こんなに腹が立つんだから！

「愛している。優人」

「ああオレもだよ……ってええっ!？」

さっきから声を裏返してばかりいる。なんだか微妙に情けない。

「えっとそれはつまり……おまえもオレを好き、ってこと？」

「ああそうだ。できれば交際を申し込みたいと思っている」

交際、だって。なんて古臭い……いやそんなことはどうでもいい。今つまりオレは高雄に愛の告白をされてるわけで、つきあってくれといわれてるわけで！

「返事は？」

「待つてろ。すぐ行く」

宣言してオレは電話を切った。

こんな大事なこと、電話越しになんか言えるもんか。顔を見ていわなかったら感動も半減だ。

オレは脱いだばかりのコートをまた着込んで、部屋を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3552c/>

テディ・ベアの秘密

2010年10月8日15時10分発行